

90th Anniversary 1928 - 2018



府立第六高等女学校
都立三田高等学校 同窓会
ワカバ会創立90周年記念誌

会 長 挨 拶	1
名 誉 会 長 挨 拶	2
第 六 から 三 田 へ	3
活 躍 する 同 窓 生 から の メ ッ セ ー ジ	7
三 田 高 校 の キ ャ リ ア 教 育 と ワ カ バ 会	12
今 の 部 活 ・ 昔 の 部 活	14
活 躍 の 三 田 フ ィ ル	17
全 国 の 支 部 の 様 子 (京 都 ・ 東 北 ・ 東 海)	18
76年 ぶ り の 体 制 変 更	21
丸 山 記 念 奨 学 金 制 度	23
軽 井 沢 山 荘 の 45年 間	25
楽 し い 企 画 行 事	28
お 宝 の ス タ イ ン ウ ェ イ ピ ア ノ	32
多 摩 川 河 畔 に あ る 貴 重 な 財 産	34
オ リ ジ ナ ル グ ッ ズ 大 集 合	35
年 表	36
編 集 後 記	41

ワカバ会創立90周年を祝う

ワカバ会 会長 三輪田 真 (22-6)



私たちの同窓会が発足して90年になりました。この長い歴史を思い起こしながら、皆様とともにお祝いしたいと思います。

ワカバ会は、東京府立第六高等女学校の最初の卒業生が出た1928（昭和3）年に、当時の校長だった丸山丈作先生が同窓会を作られ、自ら初代会長となられたのが最初でした。以来、母校は戦争の時代を経て1950（昭和25）年に東京都立三田高等学校となりましたが、同窓会としては継続し、今日に至っております。

発足当初は第六高等女学校同窓会という名称であり、1934（昭和9）年にワカバ会と改称していますが、同じ同窓会として90年続いているのですから、たいしたものです。今年三田高校を卒業したのが70回生ですから、三田高校としてもすでに長い歴史を積み重ねていることになります。これまでの卒業生は、第六高女と三田高校の両校合わせて2万7千名あまりを数えております。

ワカバ会では1988（昭和63）年に60周年記念誌「わたしたちの昭和史」を発行しております。この記念誌には第六高女の最初の卒業生から三田高校19回生までをカバーした世代ごとの座談会や著名な卒業生へのインタビュー記事、往時を知る先生方の文章などが掲載され、大変貴重な記録となっております。ただ、その制作に多大の労力が必要だったことは想像に難しくなく、以来、70周年、80周年のときには記念誌を発行しないまま時が過ぎてしまいました。あと10年すれば100周年なので、そのときに発行すればとの意見もあるかもしれませんが、10年後に40年間を一挙にまとめる記念誌など、とてもできそうにありません。そこで90周年記念誌では、60周年記念誌のような読み応えのある形でなく、各世代の同窓生の寄稿と当時の画像で過去30年を簡単に振り返ることができるような、そして10年後に向けて年表や記録として残せるようなものを作ることとしました。ちょうどデジタル技術が進んだこともあり、ワカバ会で保存していた古い写真や卒業アルバムに掲載された写真をスキャンしてデジタル化し、年表などもデジタル資料として収録できました。これらは次の10年以降にもつながるものと思います。

この記念誌を編集するにあたっては、西上原副会長はじめとする編集委員会メンバーの多大な努力があり、各世代の同窓生に寄稿いただくなど、多くの方々の協力がありました。関係した皆様に厚くお礼申し上げます。

この記念誌がワカバ会の皆様の記憶の糸をつなぎ、交流の輪を広げるものとなりますよう願っております。

ワカバ会創設90周年に寄せて

ワカバ会 名誉会長 都立三田高等学校 校長 笹 のぶえ

ワカバ会創設90周年、誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。また、90周年記念式典の開催ならびに90周年記念誌の作成にご尽力くださいました諸先輩の皆様方、誠にありがとうございました。

さて、90周年の節目の年に、三田高校の校長でいられるご縁を光栄に存じます。

平成28年には、『暮しの手帖』の編集長であった大橋鎮子さん（第610回）をモチーフにしたドラマが、NHKの朝の連続ドラマで放映されました。それを契機に、週刊エコノミストの連載『名門高校の校風と人脈』は、三田高校を取り上げ、私は、掲載された58名の方々のエピソードをワカバ会の諸先輩方からお伺いできる貴重な取材の場に同席することができました。

その後、大先輩である猿橋勝子さん、石井好子さん、いわさきちひろさん、いぬいとみこさん等の伝記を紐解き、三田高校の前身である府立第六高等女学校時代からの歴史を辿り、『戦火のなかの子どもたち』『ながいながいペンギンの話』等の作品を改めて鑑賞し、在学中に培われた大先輩方の気質がその作品の中に脈脈と息づいていることを確認しました。さらに、そこで知ったこと感じたことを、現役の在校生たちに語って聞かせる機会まで得られ、連綿と続く本校の校風を、後輩たちに伝える一助となることもできました。

この経験は、勤務する学校と在籍する母校を、私も生徒もより深く知る機会となり、三田高校が、かけがえのない素晴らしい学校であることを改めて、実感できる貴重な経験となりました。

『名門高校の校風と人脈』の中では、サントリーホールにおける三田高校管弦楽団とニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルの演奏会や、ロープスキッピング世界大会第3位の3年生の生徒の活躍も紹介していただきました。さらに、平成29年劇団四季アンデルセンの公演では、68回生の卒業生が舞台上で華麗な舞踏を披露しています。このように、ワカバ会を盛り立てていく、若い生徒たちが次々と三田高校から輩出していることは、誠に誇らしいことです。

その三田高校の同窓会であるワカバ会が末永く栄えることを祈念いたしまして、創立90周年のご挨拶といたします。



第六から三田へ



全景

現在の三田高校



正門



校庭



オセンチ山



更衣室前



体育教官室



通学路



通学路

昔の三田高校



正門



校舎風景



上空から



赤羽橋



田町駅



物理の授業



歯科検診



調理実習



茶道の授業



室内温水プール

第六から三田へ

歴代会長

丸山丈作会長(初代) 1928(昭和3)年～1940(昭和15)年

同窓会づくりの中心となった丸山初代校長は、同窓会長も兼任、ワカバ会盤石の基礎を築いた。新しい女子教育の実現に独自の高い教育理念をもってあたり、形式にこだわらず、自由な合理性を尊び、知育・徳育・体育を総合した全人教育を通して次代を担う賢い女性を育てることを目指した。

活動の場としての同窓会館建設・農園寮地の寄付など生涯教育の場としてワカバ会を発展させた。1971(昭和46)年 ご逝去。



第2代から第7代まで校長が兼任

伊井松蔵会長(第2代)	常田宗七会長(第3代)	鈴木桃太郎会長(第4代)
百田治朗会長(第5代)	今野善胤会長(第6代)	西村三郎会長(第7代)

篠塚光会長(第8代 第六高女1回) 1965(昭和40)年～1979(昭和54)年

同窓生初の会長。昭和20年代から散逸した同窓生の名簿を収集整理するなど、ワカバ会の再開に尽力し、長らく副会長を務めた。1987(昭和62)年 ご逝去。

若菜允子会長(第9代 高5-4) 1979(昭和54)年～1994(平成6)年

就任と同時に組織改革に着手、委員会制度を導入し、現在のワカバ会活動の基礎を作った。軽井沢山荘の増築改装計画を練り、実行委員長として陣頭指揮。1982(昭和57)年に新装された山荘は、同窓会経営の和やかな宿泊施設として新旧同窓生の交流親睦の中心になった。弁護士活動の傍ら、数々の政府委員会委員を歴任、法曹界の後進育成にも精力的に活動した。2016(平成28)年ご逝去。



小野紘一会長(第10代 高8-3) 1994(平成6)年～2003(平成15)年

任期中に会報わかばの春秋年2回発行、ワカバ会事務局に電子メール、ホームページを開設、また同窓会総会にホームカミングデー制度導入など、同窓会活動の活性化、電子化を図った。弁護士活動の傍ら会長退任後も理事を務めている。

第六から三田へ

笠原俊也会長(第11代 高15-4) 2003(平成15)年～2012(平成24)年

軽井沢山荘の閉鎖を決定後、新校長の強い要請を受けいれて、在校生が利用できるよう山荘を改築し、再開して提供した。新公益法人制度検討のため、一般会員を含む委員会を設置して、ワカバ会活動の将来像を論議。一般社団法人としてより自由な組織とする方針を決めた。弁護士活動の傍ら、難問続出のワカバ会運営を冷静にリードした。

三輪田真会長(第12代 高22-6) 2012(平成24)年から現在に至る

就任後すぐに一般社団法人ワカバ会への移行を決めて、臨時総会を招集。発足以来のワカバ会定款の大改訂を行い、新生ワカバ会を誕生させた。また山荘と土地の売却、多摩川河畔の駐車場経営をやめてトランクルームにするなど、ワカバ会運営の経済基盤を見直した。

第10代会長
小野 紘一



今般、ワカバ会の創設90周年を迎えおめでとうございます。

私は若菜会長に続き、微力ながら9年半会長を務めさせていただきました。

会長としてワカバ会山荘の改築、及び会の農園の維持管理の任等に当たってまいりました。

その後ワカバ会は順調に運営され、今日に至っております。

会といたしましても、今後100周年を迎えるにあたり、会員の皆様方のご協力により、なお一層発展することを祈念いたしております。

第11代会長
笠原 俊也



ワカバ会創立90周年お祝い申し上げます。

ワカバ会創立80周年記念総会を担当した会長として、ワカバ会のこの10年の確かな歩みと発展を嬉しく思います。

ワカバ会が府立第六高等女学校及び三田高等学校の卒業生の懇親の場と母校との絆の中心として、有意義な活動を連綿として続けてこられたことに大いなる敬意を表します。

ワカバ会は、これからまた100周年に向かって新たな歩みが始まります。

100周年記念総会でお会いできることを楽しみにしております。

ワカバ会の益々の隆盛と会員の皆さまのご健勝を祈り致します。

活躍する同窓生からのメッセージ



大好きな歌を歌える幸せ

山口 悠紀子 (17-5)

私の父は交響曲が好きで、暇さえあればSPレコードを聴いていた。その影響で、私も幼い頃からクラシック音楽が大好きだったが、家にレコード、蓄音機はあってもピアノは無かった。ピアノを弾きたい一心の私は、学校のピアノを使わせて欲しい、と先生にお願いし、幸運にもその願いは叶った。小学校から高校まで、始業前や放課後に一人ピアノを弾いては楽しんでいた。高校3年のある日、音楽の加藤先生の「あら、あなた良い声ね」の一言が、私の人生を変えたのである。単純な私はすぐに音大音楽科受験を決意、二年浪人して東京藝術大学に入学、大学院を終了後、ミラノに留学した。帰国後はオペラ制作を中心に、合唱団や後進の指導にあたってきたが、自分の歌については25年余の長いブランクを過ごしてしまった。しかし、還暦を機に歌への情熱が再燃した。声の基本から学び直して、演奏活動を再開、2016年には古希記念リサイタルを開催した。歳は重ねたが、これからももっと美しい花を咲かせたい、との強い想いから、現在でも週1回のレッスン受講を欠かさない。幼い頃から憧れを持ち続け、夢をひたすら追いかけて、今も大好きな歌を歌える幸せを、私は日々実感している。



ワカバ会と関わった30年

小針 淳 (40-3)

私が三田を卒業したのは1988年、この年はちょうどワカバ会60周年記念総会が開催されたため、放送部OBとして、音響のお手伝いをさせていただいたのがワカバ会との縁となります。当時のワカバ会では、会員約2万名の情報をすべて個人ごとに用意された葉書大のカードで管理していました。そのため、沢山の引き出しから手動で目的のカードを探し出す必要がありました。そこでパソコンを利用して、名簿を管理するシステムを導入することになり、多少パソコンに詳しくない私と同期の友人が、その開発および名簿の電子化作業をお手伝いすることとなりました。手書きされた2万件の情報は、卒業生に声をかけて人海戦術で手入力しました。確認作業も当然手作業なので、かなり手間がかかったことを記憶しています。約30年の間にシステムは数回刷新されましたが、この時作ったデータは、更新を繰り返しながら現在も使用されています。また、名簿が電子化されたことで、事務作業の軽減とともに、会報を送付する際の宛名を維持会費の振込用紙に印刷することが可能となり、一石二鳥となりました。名簿の電子化の後しばらくの間、広報委員として会報「わかば」の編集に携わり、紙面の刷新などを行いましたが、その後は長らく一評議員としてのみワカバ会と関わっていました。2015年より理事を拝命し、現在に至っております。今後は微力ながら母校およびワカバ会の発展に寄与させていただければと思います。



コーラス部で得た人生の宝

志田 雄啓 (46-1)

私は、三田高校に入学しなかったら、だいぶ空虚な人生になっていただろうと思っている。私は、歌好きが高じて三田高コーラス部に入部し、そこで生涯を通しての友人と、自分の現在の職業「声楽家」を得るに至った。自分のそう長くもない人生を振り返ってみると、高校時代は「得体のしれない馬力」に満ち溢れている。素晴らしい演奏をしようという目的に向かって、まさに猪突猛進なのである。部員同士の激論や喧嘩もしばしばで、その真剣さから生まれた音楽の感動、腹の底を見せ合った友情は、恐らく高校時代にしか得ることのできない、私の人生の宝である。この暑苦しいまでの気迫に正面からご指導をいただいた音楽科教諭平松剛一先生、勉強そっちのけで部活に打ち込む我々を受け入れる度量を持った三田高校は、私にとって最高の学び舎でありました。これから創立100年に向かって、三田高校、及びに三田高コーラス部が、更に素晴らしい発展を遂げますことを、心より祈念申し上げます。

<プロフィール>

志田雄啓 (テノール歌手)

都立三田高校卒。東京芸大卒。同大学院オペラ科修士、博士課程を修了し博士号取得。第74回日本音楽コンクール声楽部門第1位。五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。N響、東フィル他と共演。「黒船」で新国立劇場デビュー。



テニス部から始まったデザイナーの道

秋山 具義 (37-4)

1966年生まれなので干支はうま年で、60年に一度の丙午(ひのえうま)です。人口統計上その前後の年の25%も出生率が低かったので受験制度の変更がしやすかったのだと思いますが、私たちの年から都立高校の試験が3教科から5教科になり、受験する都立高校を選べるようになったのです。それまでは日比谷、三田、九段、どこに入れるかわからなかったんですね。つまり、都立三田高校を指名して入った最初の年の生徒です。東京タワーの近くということと、女子が多くて楽しそうということで三田高に入りたいと思ったんだと記憶しています。単純で不純な動機でした(笑)。

入学してすぐにラーメン二郎と出会って、その後の好きな食べ物のベースができたのも三田高に入ったからでしょう(笑)。テニス部で毎日激しい運動をしていたので、ラーメン二郎をいくら食べても太らなかったカラダが懐かしい。そのテニス部で作ることになったTシャツのデザインを担当してみんなにちょっと褒められたことをきっかけにデザインにどんどん興味を持っていきました。今こうやって広告などでデザインを柱に仕事しているのは、三田高生の時の体験と思いから繋がっていると思っています。高校時代は、将来の入り口がうっすら見えてくる時です。みなさん、その瞬間を見逃さずに高校生活を過ごしてください。



出会いの始まり－高校時代

阿部 眞弓 (24-7)

在校生の皆さんも、将来の職業選択を視野に入れ、進学先を選んでいることと思います。私は三田高校に在学中に医学部進学を決めました。当時、最終的に数学科か医学部か、学部を絞り切れませんでした。

私は子どものころから、聴覚障害を持つ子や病弱な子の手助けをする役目を与えられることが多く、自然に弱者に寄り添う生き方を身に付けてきたと思います。そんな私の心に医学の火をともした出来事は、祖父が悪性リンパ腫を患い死んだことでした。祖父は、私が夏休みに一人で東京から宮城県を訪ねていくと、必ず駅まで迎えに来てくれました。優しく上品でハンサムな自慢の祖父でした。しかし、あの日、母に連れられ仙台の病院まで会いに行った祖父は、やせ細って、まったく別人の形相になっていました。

祖父は、あのあと田舎の病院の薄暗い部屋の隅で、痛い痛いとしみじみながら死んでいったのだと思います。私はこの祖父の死を境にして、医者になることを心に決めたのでした。

それから年月が過ぎ三田高校に入学し、数学科の荒井淳雄先生、田代久人先生という、人間的にも尊敬できる素晴らしい先生がたとの出会いがありました。私は難題を解く面白さから数学にのめりこんでいきました。そして、大学受験を考えると、東京の数学科と東北大学医学部、どちらにしようか、悩んでいたのです。両親は、「女の子なんだから」という理由で東京の大学に行くことを望んでいたのですが。

その時に、相談に乗ってくれたのは数学科の先生方でした。なかでも、田代先生は「お前な、人の命を救えるってのは素晴らしいことだぞ。数学科に行って教師になるのもいいけれど、医者になれば人の命を救えるんだぞ」と、強く医学部進学を勧めてくれました。その一言が、私の迷いを吹き飛ばしてくれたと思っています。そして医学部に進学し、医者になって長い年月が経過しました。振り返ると、違う道もあったのかもしれませんが、やはり、田代先生に勧められた「人助けのできる」医師の道を歩んでよかったと感じています。

呼吸器科医として歩んだ間、一生懸命に患者さんのために努めていました。自分の生活を顧みず、自分の時間すべてを患者さんにささげた時代もありました。新米医師のころ、力不足で十分なことができなかった患者さんの顔も浮かびます。それでも、不思議なことに、今、臉に浮かぶ患者さんの顔は、笑顔です。亡くなられた患者さんたちも許してくださっているのかなと思います。

現在、老後といえる年代になり、健診や人間ドックの予防医学に携わっています。家庭環境も変化し、昔のように一心不乱に患者さんファーストに生きることはできませんが、どなたであっても、私と出会った日以降は以前より健康になっていただく、「健診は一期一会」をモットーとしています。田代先生に背中を押され、積み重ねた患者さんとのかけがえのない40年が、今の私の医療を支えています。



今の自分があるのは…

外ノ池 祐太 (45-1)

私の高校時代は、今から25年以上前で、Jリーグが開幕し、日本がワールドカップ初出場に近づいた「ドーハの悲劇」があった頃だ。時代は日本経済のバブル崩壊、景気が停滞するとともに就職氷河期と呼ばれる時代に突入していった。

大学を卒業し、日系と外資系企業と働いたのちに、勉強が好きなわけでもないのにイギリスの大学院に留学した。帰国後、「飲食店」というその空間が好きだったから、小さな飲食店を開店した。その後エスニック料理を中心としたレストラン経営を行い、去年は念願の銀座にも店舗を出すことができた。私が何とかここまでやって来られたのは、三田の仲間のおかげといっても過言でない。仕事の悩みを聞いてくれて酒を飲むのを付き合ってくれるのは、アサヒビールの市川尚君。高校在学中は、顔と名前は知っている程度の関係だった彼とは、卒業後15年して偶然再会した。彼は、IR担当として、経営陣と共に世界各国の投資家に説明するという正にグローバルな仕事に就いている。また、悪友の宇野忍君はこれからの時代英語が必須だと言われたのに「英語は苦手だからやらない」という偏屈者でありながら、銀行という巨大組織の中で同期最年少支店長として活躍している。流行を追う私とは違って独立独歩の彼からは学ぶことが多い。そして、日本で一番多くの同窓会を開催している真田幸次君は、私の10歳年下の同窓生だ。同期会を開催しようとした時に、真田君のサービスを知ったのが出会いのきっかけだ。彼は次世代ベンチャー起業家として注目され、私も経営者として参考になっている存在だ。

今、私は飲食店経営のみならずIT企業運営や投資家としても活動しており、興味のあることには、分野を問わず貪欲に熱く取り組むようにしている。私は同窓生から常に刺激をもらい、三田高校の卒業生であることに誇りを持っている。



学芸員の長き道のり

逢坂 恵理子 (21-5)

1960年代の後半、三田高校生になってから、私は学芸員という仕事を知りました。進路指導の面接で、担任の川島先生に学芸員を目指したいと話したことを今でも思い出します。大学では美術史を学びましたが、卒業後、私は学芸員としてすぐに就職できたわけではありませんでした。美術界で働き始めたのは25歳頃です。編集補助やアート・コーディネーターなど様々な経験を経て、公立美術館の学芸員職についたのは40歳を過ぎた遅い時期でした。美術界での経験は40年以上になりますが、若い頃はかくも長い間、仕事を続けられるとは予想すらできませんでした。振り返ってみると学芸員になるまでに遠回りしながら経験した多様な仕事は、たとえ、ささやかな事務仕事であっても、ひとつとして無駄なことはなかったのです。

人生では様々な岐路に遭遇します。選択した道が、自分にとって正か負かを結論づけるのは簡単ではありません。与えられた状況を自分に引き寄せるには、情熱や感謝とともに少し距離を置いて見るクールな視点や、長い時間も必要に思います。そして深刻になり過ぎない大らかさやユーモアも、時にはやり直す勇気も必要です。皆さんが、多様な可能性を秘めた道を、地道にかつしなやかに歩むことができますように。



「国立中国美術館（北京）日中国交正常化35周年記念個展開催式にて」

人間の大河

馬越 陽子（4-1）

創立90周年お目出とうございます。

一昨年私は第71回日本芸術院賞を「人間の大河—いのち舞う・不死の愛」でいただき両陛下の前で作品のご説明をした栄誉に浴した事は、生涯忘れないでしょう。

「人間の大河」は24年前パリ・ジャパンフェスティバル・「文化間の会話」・ユネスコ協賛で「人間の河は解放を求める」とのテーマで個展をパリで開催した事に始まった。その後この「河」は国交回復35周年記念企画として北京の国立中国美術館で日本人洋画家として初めて個展を開催してから、長江と合流して「大河」へと変容した。

この「大河」の出発点は私の三田高校時代に芽生えたと思う。当時「人間とは何か」「私は何をなすべく生まれたのか」の問いが心の奥底に棲みつきはじめていた。これは今も続いているのだが。私の姉は第六高女時代、激化する戦争の最中、学業をよそに学徒動員で工場で勤労奉仕の日々だったとき。私の三田高校時代は大戦終了4年後の事で戦争の傷跡が残る東京だった。私達の下から新制高校が発足し男女共学となった節目の年だった。三田高校の気風は戦後の暗さを吹きとばし、自由潤達な生気が漲り、室内プールでは上級生がジャンプ台から飛び込む姿に目を見張った。幼少から絵をかくのが好きだった私は絵画班ではじめて油絵をかいだ。その頃はダンテの神曲やシェクスピアに興味があり東京女子大の英文科に入った。英文での卒論は「人間性の解放」という副題で「人間を離れて芸術はない」と冒頭に記した。その後東京女子大で学部・大学院と学んだがこの「イデー」は私の学業の根本に座している。何年も前、かつて安井賞に入選した「大地の歌」を母校の表玄関に掲げていただいた事は感謝の一言につきる。

文化庁の派遣留学中に見た名作の数々は皆闇を突き抜けた光りを放ち、「人間を解放する輝き」を求めていた。マドリットのプラド美術館「ゴヤの黒の時代」にさえそれはあった。

私の「人間の大河」が時代と共に流れて、人々の心を解き放ち鼓舞する事が出来るよう真摯に生き画きつづけようと思います。



三田高校のキャリア教育とワカバ会

都立三田高校では、キャリア教育の一環として、将来の仕事の中で自己表現していくという意欲を持ってもらうことを目的とした「キャリアガイダンス」を実施している。キャリアガイダンスでは、毎回様々な分野の第一線で活躍する職業人に講師として登壇いただいているが、ワカバ会では2008（平成20）年度より、同窓生の中から講師を紹介している。

以下は、キャリアガイダンスに講師として登壇いただいた同窓生の方々から寄稿いただいたメッセージである。

★わかば第75号より抜粋

「三田高校のキャリア教育」

三田高校 降幡 高志 副校長

「キャリア教育」という言葉がよく聞かれます。子供達が将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力を育てる教育です。三田高校は近年、大学進学実績を着実に伸ばしています。——どんな生き方が自分らしいのか、そのために進学先はどこを目指すのかを悩み、考えて進路を選んでほしいと思います。



日々の暮らしを生かす住宅設計

後藤 真理子（19-7）

大学卒業後も研究室に残り、住宅設計の仕事に携わっていました。その研究室では、見た目や格好の良さを重視し、住宅は全て作品と考えていましたから、生活のあり方を設計にどう反映させるのかということを学ぶ機会はほとんどありませんでした。

数年間研究室に在籍し、仕事がひと段落したのをきっかけに、パリへ事務所探しに出かけました。オイルショック後の不況のため、仕事先はなかなか見つからず、スペインやイタリア、ドイツなどの都市をあちこち回り、2ヶ月ほどで帰ってきました。

その後家族とローマに住む機会がありました。生後3ヶ月の娘が一緒でした。半年間ふつうの生活を送り、市場で買いものをし、知り合いのお宅を訪問し、まちのあちこちを歩きました。それまで日本で建築教育を受け、ささやかながら設計の仕事をしてきましたが、イタリアの伝統的なまち並みや建物が、毎日の暮らしと何気なくつながっていることに、新鮮な驚きを感じました。

帰国後個人の事務所を開き、住宅を中心に設計の仕事を始めました。パリでの仕事さがし、気まぐれなヨーロッパ旅行、ローマの生活体験は、今までも住まいをデザインするときの原点となっています。日本人ならではの、あたりまえの日々の暮らしをどのように設計に取り込めばよいのか、たくさんのヒントをこれらの経験から得ることができました。



蒲田切子を創作

鍋谷 孝 (31-2)

ワカバ会90周年おめでとうございます。

私は、ガラス工芸を中心とした企画、デザイン、販売の仕事をしています。27年前に会社を設立。実家の切子の技術を使い、オリジナルの江戸切子製品を作りました。当時は、江戸切子の言葉も認知されていない頃です。リサイクルガラスや大谷石を入れたガラスの江戸切子にも挑戦しました。その後、江戸切子の中でも知られていない「玉カット」の技術を中心に、オリジナル蒲田切子を制作。蒲田切子は、思いがけず、観光庁をはじめ、多くの賞をいただくことになりました。

振り返ってみると、私の仕事の原点は、白珠祭での映画制作だったかもしれません。

映画は、2年生の時。白珠祭のクラス参加行事でした。映画制作は、経験のない素人。予算ありません。脚本は、当時人気映画のパロディー版。ロケ地は、教室や近くの公園を使いました。また、修学旅行に便乗して新幹線の中や京都でも撮影しました。文化祭前日まで、仲間と徹夜の編集作業を終えて、高校へ。上映してからの数分後、観客の三田生の大きな笑い声。そして、白珠祭のグランプリ受賞。

この時の「挑戦と創作の喜び」が、今も、私の心の奥で小さな珠として光っています。三田高に、感謝。



坂の上の空をあおいで

菅野 元行 (38-8)

綱の手引き坂の上の空を見て登校し、懸命に模索しながら何でもできる気がしていたが消極的だった三田高時代（弓道部）。文系が得意だったのに、大学では消去法で化学科に進んでしまったものの、卒業研究で研究室の自主的な研究活動に魅かれてしまい、気が付けば大学教員に。難関大学出身者が圧倒的に多い学会においても、英文の研究論文もそれなりにアクセプトされ、欧米諸国の国際会議で研究発表を行うこともできました。苦手だと思っていた教育も必要に応じて努力し、今では実践女子大学で環境・エネルギー領域の教育・研究を行っています。決して順風な人生ではありませんでしたが、周囲の方々に支えられてますますの半生でしょうか。何が起こるか分からない人生で50年を迎えつつある今、生かされていることに感謝しています。まさに、人間万事塞翁が馬。今は日野市の大坂（乙女坂）の上の空を仰いで出勤しながら未だに大きな夢を見続けています。綱の手引き坂、千代田区の錦華坂、そして乙女坂と、登る坂の距離も高低差も長くなってしまいましたが、坂が急なほど上を向いて歩けることに気が付きました。今後、もうゆっくりでも着実に、空を見ながら坂を登っていきます。

今の部活・昔の部活



女バレの思い出

渡邊 恵子 (35-1)

「あと一歩前にでろ！」これはGさんこと女バレの顧問、和田米郎先生が練習中私たちによく言っていた言葉だ。この言葉はずっと私の中にあり、留学時代や大学院での研究、仕事でも何か苦しい時があると乗り越えるきっかけになっている。高校時代、部活をやりきって本当に良かったと思っている。

しかし、当初入部したものの最初は休みがちだった。理由は覚えていないが、今思えば経験者が多い中で最初居心地が悪かったのかもしれない。そんな中、別のクラスにいた同期が「部活、やる気ないの？一緒にがんばろうよ。」と誘ってくれて火がついた。女バレを通して一生の仲間ができたのももちろんのこと、更衣室で会う他の運動部や、男バレも含むバレー部OB会を通じて先輩や後輩との交流も生まれた。

私は現在シンクタンクで日本が途上国に支援した道路、発電所などの効果を評価したり、紛争影響国に関する調査研究を行っているためなかなか日本にいないが、つい先日、20年以上ぶりに女バレ仲間数人と再会ができた。同級生ともまた違った密な時間を過ごした仲間は、何年会ってなくても会えばすぐにあの時の時間が流れ、特別な時間を作ってくれる。

まだまだ人生にはあと一歩が必要な時がくるだろう。私はこれからもあの言葉とともに乗り越えていきたい。(注:女バレ=女子バレー部のこと)

弓道部

浪川 俊幸 (元三田高校教諭・弓道部顧問)

90周年おめでとうございます。私は、平成19年から平成24年まで5年間、三田高等学校に国語科教員として勤務し、弓道部の顧問を担当しました。卒業生が交代で指導に来てくださったおかげで、弓道未経験の私は、ただ遠くから様子を見るだけでした。弓道部は、1階玄関横の3人立ちの道場で、朝、昼、放課後、土日と欠かさず練習を積んでいました。

当時の実績としては、平成21年全国総体（インターハイ）都予選女子個人で2年女子、菊地晴佳さんが優勝し、同年夏、奈良県で開催されたまほろば総体に出場しました。翌年の平成22年には、全国総体都予選男子個人2位入賞で、2年の伊藤佑介くんが夏の美ら島（ちゅらしま）沖縄総体に進出しました。

三田高校弓道部のこれからのご活躍を祈念しております。



水泳部

渡辺 早紀 (61-5)

創立90周年誠におめでとうございます。この度、この寄稿文を執筆させていただくことになりましたが、これも、現在ワカバ会理事を務めていらっしゃる在学時の顧問の先生と、偶然同じ都立中高一貫校で務めていることがきっかけです。水泳部がつなげてくれた縁を深く感じています。

久しぶりに三田高校を訪れると、学校の雰囲気が大きく変わったことに驚かされます。やはり1番は制服が出来たことでしょうか。また、プール周辺も整理され、先輩方の教科書が詰まった棚や、某日本史の先生によく「片付けろ」と怒られたゴミ箱もありません。それでもあの扉を開けて昔と変わらないプールに入ると、高校時代にタイムスリップしたような感覚になるのが不思議です。

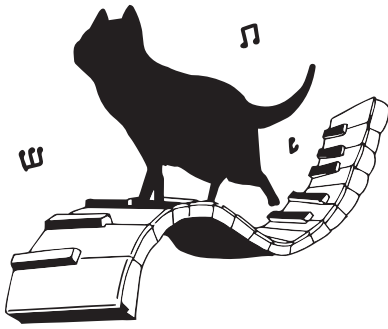
第71代水泳部(2017年度)は、男子30名・女子16名の大会所帯。これだけの人数の部活にまで成長するまでには、歴代の顧問の先生・先輩が、様々な伝説(笑)と共に伝統を引き継いでくださったおかげです。これまで、初心者から全国クラスの選手まで、様々な選手・マネージャーがああプールで努力を重ね、記録を伸ばしてきました。近年では、1999年に男子自由形でインターハイ出場、2012年にも女子平泳ぎで関東大会に出場。2008年には柴田亜衣選手、柴田隆一選手などのオリンピックが来校しました。まさにあのプールは、水泳部と共に様々な歴史を刻んできたといえます。

在学時の記憶として、やはり最初に思い起こされるものは「16校」でしょうか。私だけでなく、出場したことのある誰もが特別な思いをもっているはずです。会場の緊張感、笑い・涙する先輩や後輩、同期の姿…そして私にとっては、当時のあだ名「サキティ」とレース前に叫ぶ某先輩の応援の声…が今でも印象的です。以来、水泳の魅力に憑りつかれた私は、今は競技役員として毎年16校にも参加をしています。昨年(2017年8月15日・16日)行われた64回大会では、男子16位・女子10位(出場32校中)の大健闘。決勝にも5名の選手が出場し、輝かしい活躍をしていました。

さて、これまでも大きな変革を遂げてきた16校ですが、2018年度、オリンピックにむけた改修工事に伴い、辰巳国際水泳場での開催が最後の年となる節目を迎えます。今年度は、多くの卒業生に辰巳でお会いできることを楽しみにしております。

末筆ながら、三田高校並びに水泳部の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

(注:16校=東京都十六高校対抗水上競技大会のこと)



音楽系部活動と合唱コンクールの「第九」

仲田 賀一（元三田高教諭・音楽系部活動指導者）

私が三田高校に着任したのは、平成18年の4月です。それから10年間三田高校に在職し、色々な経験をさせて頂きました。コーラス部と「第九」についてということで依頼されましたが、吹奏楽部と管弦楽部を併せて振り返らせて頂きます。

まず、各部活の部員数の変化ですが、私が三田高校に着任した平成18年は、吹奏楽部64人、管弦楽部19人、コーラス部7人でした。この数字は3年生を含めているので、吹奏楽部以外は今と比べて細々と活動していたことが分かります。これが平成29年には、吹奏楽部59人、管弦楽部58人、コーラス部30人と、吹奏楽部は少し減りその他の2つは大幅に増加しています。

着任した年の合唱コンクールで、管弦楽部・吹奏楽部の伴奏での1年生音楽選択者による合同合唱「ハレルヤ」を、2年目に「アイダ」の合唱に取り組み、3年目の平成20年度から「第九」を始めました。今思い出しても、本当に無謀なことをやってしまったと感じています。ですが、毎年本番を終えた生徒たちからは、「こんなに難しいものができるわけがないと思ったけれど、皆で力を合わせて作りあげて感動した。」「全体練習が始まったところからワクワクしてきて、本番は声が響いてとても楽しかった。」等の感想が聞けるので、やって良かったな、来年もまた頑張ろうという思いで私自身も取り組んでいました。「第九」をやりたいから三田高校を選んだという受験生も出てきたことで、管弦楽部・コーラス部の人数も増えたのだと思います。

廃部寸前だったコーラス部は、色々な外部の合唱祭やコンクールに参加し、「第九」のソリストも務め、校内外で活躍しています。オーストラリア大使館に勤める職員のお子さんのためのクリスマス会に毎年招待され、合唱を披露しお食事まで頂いており、三田高校ならではの活動だと感じています。

3つの音楽系部活動が協力し競い合い、さらに充実した活動を展開することで、三田高校自体もさらに発展して欲しいと願っています。



活躍の三田フィル



三田フィル活動の経緯

河西 格 (34-2)

1989年に都立三田高等学校の音楽教諭であった三澤寿喜氏と「三田高校管弦楽部」の卒業生が集まり演奏活動を開始。翌年、「三田高校OBオーケストラ」を結成しました。1992年に池上ルーテル教会にて開催した初めての演奏会は100名近い聴衆で立ち見が出るほどでした。これをきっかけに翌年より年1回の定期演奏会を開催することになりました。

2001年には現在の「三田フィルハーモニーオーケストラ」と改称しました。三田高校の卒業生以外のメンバーも多数参加するようになったためです。このころから室内楽演奏会「ミニ・クラシック・コンサート」を開催。指揮者をおかない小編成楽曲に挑戦し、団員のアンサンブル力の向上を目指してきました。モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」の管弦楽を担当した他、「大田区アマチュア音楽祭」への参加、港区立三田図書館主催のコンサート出演など、外部へも活動の幅を広げてきました。

節目となった2016年は色々な出来事がありました。第25回定期演奏会では後藤悠仁氏指揮、清水将仁氏によるピアノ独奏でラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を演奏し、団史上最大の集客を記録。三田高校管弦楽部の定期演奏会にOB・OGが出演し、それをきっかけに、社会人になりたての若いメンバーが加わってくれました。また、秋の三田フィル「ミニ・クラシック・コンサート」では三田高校管弦楽部のみなさんにドヴォルザークの弦楽セレナーデを演奏していただきました。

創立当初、全員学生だった三田フィルも、現在は20代から60代まで、幅広い世代で活動しております。母体は三田高校のOBオケであることを大事にしながら、益々発展していけたらと願っております。

全国の支部の様子



京都支部の活動について

常田 道子（第六16-イ）

昭和21年京都在住となった私は、暫くしてからすでに第六の先輩方が20人近く京都においでになることを知りました。

先生方が京都を訪ねられた時に、私はお会いできませんでしたが、氷上先生、涌井先生、永田先生がたがいらしたとか、高城先生は大阪の毎日ホール建築時に音響の専門家として招かれてお目にかかることができました。

当時、宮内庁京都御所所長夫人の石川様（5オ）からお誘い頂いて京都ワカバ会の会合に出席いたしました。それまでも時々お集まりをされていたようです。ご出席の先輩方は米田道子様（1D）をはじめとして卒業年度は種々ですが皆様凛として知性に溢れていらしてご立派でした。私は後輩としてとても誇りに感じました。

米田様は編み物教室を主宰され、山田啓子様（5オ）は津田塾卒で今も英字新聞を読まれていました。樋爪知恵子様（7ウ）今井敬子様（11ウ）はお能に堪能でお一人の主催で演能会をなさるほどでした。これはとても大変なことだと伺いました。橋本様（12ア）は近くにお住まいで赤ちゃんを連れてお訪ねくださいました。

桐山様はとても物静かな方でご一緒に会のお当番をいたしました。西部様（13エ）は在学中水泳で活躍された方です。西堀様（15ア）は南極探検隊長夫人と伺いました。堀田様（16ア）は残念ながら10数年前に亡くなられたそうです。

私の家は桃山御陵（明治天皇）、また伏見桃山城にも近いのですが、それ故坂道ばかりです。この年になってもこの道を歩くことができることに感謝しています。女性は健康でなければ家が暗くなるとして体育を重視された丸山校長先生の慧眼、神宮競技場での運動会や、強行遠足（10里40キロ）で鍛えてくださったことを今更ながら有り難く思っています。それと京都にきて間なしに夫の友人が「へー、第六、凄いな、あれは優秀な人でないといけないと聞いていますよ、大したものだ」と言われ、今更ながら関西にまで鳴り響いている母校をどんなに誇りに思ったか、とても嬉しいことでした。

今、母校の90周年に巡り合えてとてもしあわせです。

最近京都ワカバ会は、関西ワカバ会と合流して会合だけでなく、私たちのあまり良く知らない名所などに出かけたりします。高校卒の後輩の方々がお世話をしてくださいますので、そろそろエネルギーの不足してきた高女卒にとっては本当にありがたいことです。



東北支部のご報告

松山 美念子 (8-2)

6年前の大震災の際には、会員の方々の消息を調査、報告いたし、亡くなられた方は皆無だったことに安堵しました。その旨ワカバ会本部にお知らせしました。その後、ワカバ会の事務局より、皆様のご好意により。一人ひとりに、お見舞い金をご送付頂きました。会員の皆様から、「大した被害もなかったのに申し訳ない」との電話等あり、心から感謝申し上げておりました。

その後は5月連休後に、市内の日本食を主体とする店にて、ささやかな東北ワカバ会の集いを開催して、お互いの近況報告等を話し合い、親睦を深めてまいりました。以前は第六時代の先輩方がお世話してくださっていましたが、その方々も夫々ご高齢となり、ご参加も皆無となりましたが、その後は、何とか細々と会を続けておりました。今年は世話役2人共諸事情により開催にこぎつけず、来年は何とか開催出来る様にしたいものと思っております。

今後共、何卒よろしくお願い申し上げます。

ワカバ会静岡支部の報告

稲葉 和寿子 (5-2)

私たちは毎年秋にワカバ会を開いています。静岡県は東西に長いので三ブロックに分けてお当番をしています。東部地区の沼津・伊豆・御殿場方面と、西部地区の浜松・磐田方面と、中部の静岡・清水・藤枝方面で、数年前までは担当地区で開催していました。浜松の時は浜名湖を巡りおいしい鰻を頂き、沼津では大岡信の「ことば館」を見学しました。静岡では100円の観光バスで浅間神社など市内をまわり、長い間にたくさんの思い出ができました。現在では集まりやすいJR静岡駅前のホテルアソシアを会場にしています。今年のお当番は中部地区で、来年は東部地区の予定です。



2016年11月17日
ホテルアソシアにて

参加者はいつも13人前後で、お互いの近況報告をします。10回生で最高齢の先輩は97才ですが、大変お元気で毎回出席されます。ご自身で買い物をして食事を作るなど充実した日々のご様子を伺い、私たちの目標となっています。会食の後は近くの市立美術館に行ったりします。



現在の名簿は10回生から高24回までの31名ですが、メンバーが増えず高齢化しています。静岡県内にはまだ多くの同窓生がおられると思います。よろしかったらワカバ会事務局までご連絡ください。次回の静岡支部ワカバ会をご案内します。男性もお待ちしています。

東海支部は活動継続中です

山崎 康一（29-7）

東海支部は、東海三県（愛知・岐阜・三重）在住者の親睦を目的とし、昭和34年に第六16回生の呼びかけで始まりました。会員は、夫の転勤やUターンに伴って東海三県に移り住んだ女性卒業生が中心でした。当初は日帰り旅行などを行いましたが、後年は年1回の交流会（食事会）が主な活動になりました。



私の交流会への初参加は平成17年。そこで第六の先輩方の美しい`女学生言葉、を耳にして感激したものです。そして男性だということで、平成19年から代表を仰せつかりました。

その後も名簿上の会員約130名で活動を継続しました。しかし実際の活動に関心を持ってくださるのはその2割程度に限られ、また会員の高齢化により幹事持ち回りが困難になりました。そこで平成26年に「最終総会」と称した交流会で活動に区切りを付け、その後は会への残留希望者のみの活動に縮小して現在に至っています。現在の会員は31名（第六卒業生1名、三田卒業生29名、元教員1名）です。

会の縮小後は、名簿の維持のみを行っていましたが、「会えないのは寂しい」との会員の声に応じて、昨年10月に2年ぶりの交流会を豊橋市で開催しました。

今後は、2年に1回程度の交流会と通信紙の発行を継続するつもりです。



ワカバ会は、2013（平成25）年4月、国の公益法人改革に対応して、一般社団法人となった。卒業生の親睦組織である同窓会が、社団法人組織となっているところは数少ないが、ワカバ会は1936（昭和11）年に東京府から社団法人の認可を受けた。以来、公益事業として在校生への奨学金、同窓生、一般人を対象にした各種の講習会や、音楽会、観劇会などの活動を行って来た。

国は2006（平成18）年に新公益法人法を公布、明治以来の硬直化した公益法人制度を改正し、公益社団法人と一般社団法人に区分して認可することになった。公益社団法人は事業活動の50%以上の公益目的事業を行い、監督官庁の厳しい審査が必要だが、税の特典が受けられる。一方、一般社団法人は、公益事業より一般事業を主にした法人で、これまでの公益事業による保有財産は、今後は公益目的支出計画を作成して、順次使用していくが、それ以外の事業は、監督官庁の干渉なしに比較的自由な運営ができる。

■一般社団を選択

ワカバ会は2010（平成22）年2月、会長を委員長とし、関係理事や、一般会員の中から学識経験者と希望者を入れた15人の新公益法人制度移行委員会を設置、専門会計士による勉強会や数回にわたる意見交換を行い、どちらの道を選ぶのが、ワカバ会の今後にとって良いかを検討した。委員会の討議では、共益性を主とする一般社団法人にも一定の税務上の特典があることから、無理をして公益法人を目指すのは今後の運営上得策でないという意見が多く、同年秋には「一般社団法人」を目指して申請の準備をすることを理事会に諮った。理事会で検討の上、同窓会として会員の親睦を第一義に、三田高校への貢献、社会的貢献もこれまで通り継続していくスタンスで、共益的一般社団法人としていくことを決め、2011（平成23）年春の評議員会、総会に諮り、了承を得た。さらに、外部専門家に監督官庁である東京都との折衝などを担って頂き、一般社団となった場合の財産の使い方、公益事業の範囲など具体的な折衝の進め、2012年（平成24）春の総会には、新生ワカバ会が今後永続的に発展できるような組織にするための新しい定款の内容を説明した。

■より自由な活動を

新組織は会員総会と理事会、代表理事、監事というシンプルなものになり、審議機関だった評議員会を廃止、総会で選出された理事で組織された理事会が執行部となり、代表理事を選んで会長とする。また総会で選出された監事が理事会の意思決定、予算執行、代表理事の業務執行を監査し、総会に報告する。理事会の重要性が増したため、理事の任期を2年と短くし、会員（総会）の監視を受けることになった。同窓会法人としてワカバ会が行う事業は本質的に変更はない。従来からの社団の財産は、公益目的支出計画に基づき、奨学金事業、各種の企画事業、

同窓会報の発行などに将来にわたり支出していく。新制度への移行は、より自由な同窓会活動を通してワカバ会を、同窓生のため、母校のため、社会のため、活用していくことを目指す。

理事会は2012（平成24）年12月2日に臨時総会を開催し、「一般社団法人(新定款)承認」を諮った。11月に発行された会報「わかば72号」は特集を組んで、一般社団法人移行を詳しく説明、会員の理解を求めた。従来、社団法人の定款改正を決める総会では全会員の半数以上の賛成が必要だった。総会の定足数についても、約2万人のワカバ会会員が集うのは不可能で、現実的な解決方法を当局と交渉を重ねて、了承された。臨時総会の承認の後、2013（平成25）年3月には東京都の認可を得、4月1日に登記手続きを完了した。ワカバ会は76年ぶりに新体制になった。



ワカバ会 副会長 平山 孔嗣 (29-2)

公益法人制度が、約100年ぶりに改訂されワカバ会もその波に飲み込まれました。先輩方が崇高な理念によって設立された社団法人を公益社団法人として存続させなくてよいのか、そうは言っても厳しい要件のある公益社団法人では、同窓会法人として、会員のための活動に制限がかかってしまうのではないか、円滑な会務運営が継続的にできるのか、という点が今回の制度改革に際しての本会の最大の悩みどころでした。

外部専門家を含めた委員会に置いても、この点についての十分な議論がなされましたが、最後は現在の会員の最大限の利益を追求すべきとの結論に達しました。手続の中では、新定款の承認において全会員の議決が求められる場面で、委任状を含めた過半数の議決が無事なされたことが印象に残っております。2万人弱の会員を招集する場所、経費が現実的でなく、やり直しのきかない一発勝負を各会員、事務局の協力で乗り越えられたことが、現在のワカバ会の基礎となっております。

丸山記念奨学金

在校生支援は公益事業の柱に

ワカバ会の在校生支援の奨学金事業は、1970（昭和45）年に初代校長でワカバ会の生みの親でもある丸山丈作先生のご寄附を基に創設された。成績優秀で経済的に支援が必要な在校生に、授業料相当の奨学金を貸与するという形式だった。2010（平成22）年に、高等学校無償化法が公布され、都立高校の授業料が無料になったため、理事会は制度の全面改訂に着手、様々な学校や同窓会、自治体、民間団体などの奨学金制度を比較検討し、2011（平成23）年度から新制度を立ち上げた。ワカバ会が一般社団法人になった後も引き続き公益事業の柱として長く続けていく重要な活動になるからだ。

名称も「ワカバ会丸山記念奨学金」とし、返済の必要がない定額給付制度とした。成績優秀で、経済的に支援が必要な生徒に、一人年間6万円を2回に分けて給付する。5月に募集要項を全校生徒に配布、本人自筆の応募理由、担任教師の推薦文を、学校を通して集め、理事会で審査して奨学生を決定する仕組みだ。

新制度で、2010（平成22）年には2名、2011（平成23）年には、3月の東日本大震災による被災地からの転校生3名を含む7名に給付した。会員から寄せられた救援募金の一部を奨学金に充当した。2012（平成24）年には5名、2013（平成25）年には、一般社団法人になったため予算を増やし、さらに同種の奨学金との併願を認めることにした。これにより応募者が急増し、14名に給付。一般社団法人化の記念に制作した、三田高校の制服を着たハローキティの根付の販売にも奨学金寄付をつけて、多くの会員のご協力を頂き、予算に上乗せした。

2014年度には事業を拡充し、月額一人1万円、年間12万円に増額した。また経済的に困窮している人だけでなく、成績優秀者、スポーツ・芸術などに目標を持って努力している人も応募資格に加えた。募集8名に47名の応募があり、審査の結果、経済的理由8名、成績優秀者とスポーツで世界一を目指す2名を加えて10名に給付した。会報わかばでは、給付型になってからの受給者の一部(卒業生8、在校生4名)にアンケート調査、奨学金は、大学の受験費用、交通費、図書費学用品費などに利用し、大いに役立ったとの回答を得た。また、奨学金のお蔭で、アルバイトをせずに部活や勉強が出来た、家計が苦しくこの制度のお蔭で負担が軽くなった、生活や学費に重要な資金源だったなどの声が聞かれ、切実な状況の中で有用に使われていることが明らかになった。

経済状況の低迷により、若者の貧困が問題視されており、今後も在校生の実り豊かな高校生活や大学受験機会の拡大に、ワカバ会奨学金が有効に利用されることを期待したい。



一般社団法人移行記念
～在校生応援企画～ 根付け制作



校外活動と丸山奨学金

柴田 恵理 (69-1)

私は三田高校在学中、ロープスキッピングという競技縄跳びをしており、2009年から毎年行っている国際大会にも出場していました。ロープスキッピングの存在を今回初めて知った方がほとんどだと思いますが、国内での知名度が非常に低い競技です。競技特性上、

ワイヤーでできたロープを使用したり、膝や腰などに大きな負荷がかかったりするため、体育館などの室内で練習を行っていました。練習は週に2日以上、大会が近づくにつれ増やしていき、1ヶ月前になるとほぼ毎日でした。私にはそれまでスポンサーがいなかったので、練習で体育館を借りる費用、大会出場費、海外遠征費などすべて親が払ってくれていました。入学して丸山奨学金の存在を知り、是非ご支援頂きたいと応募したところ、快く応援してくださるとお返事頂きました。おかげさまで充実した練習を継続することができ、3年生の夏にスウェーデンで開催された世界大会で30秒駆け足跳びスピードが3位に入賞しました。それまで果てしなく遠い存在だと思っていた世界の表彰台でした。そこに上ることのできた喜びと達成感は忘れられません。ご支援頂いていたことには本当に感謝しております。今後も後輩たちがスポーツに限らず、幅広い分野で活躍してほしいと思っております。





緑陰の憩い 軽井沢山荘の45年間

～貴重な同窓生交流の思い出～

ワカバ会が建築・運営した南軽井沢レイクニュータウン内の山荘の閉鎖から8年が経つ。緑濃い林間の宿泊施設は、ワカバ会に集う第六高女、三田高校同窓生の憩いの場として、1965（昭和40）年11月に完成、翌年6月から利用が始まり、貴重な歴史を残して2010（平成22）年に閉鎖された。

初代校長の丸山先生が提唱された、生涯教育、社会奉仕という同窓会の使命のもとで、会員の中から、自前の福利厚生施設を持ちたいという要望が高まったのは、日本の高度成長が始まった昭和30年代だった。ワカバ会は、事業収益や会員の寄付協力により1963（昭和38）年に南軽井沢に1千坪の土地を購入（300万円）。1965（昭和40）年には会員からの募金と事業収入合計680万円を投じて山荘を建設した。この年は、西村三郎校長・会長の助言で、ワカバ会会長は同窓生からの選出することになり、長く副会長として会を支えてきた篠塚光氏が第8代会長に選ばれた記念すべき年だった。



建物が老朽化し、手狭になった1980（昭和55）年には、第9代若菜允子会長が中心になって、ワカバ会創設55周年記念事業として会員から寄付を募り増築を計画、1982（昭和57）年に総工費7500万円で旧館の隣に、瀟洒な新館が落成、収容人員が倍増した。

山荘は、4月から11月までの営業ではあったが、同窓生や家族、友人など毎年1000人を超す利用があった。声楽などのコンサート、

コーラス、絵画、ゴルフ、ハイキングなどの行事が催され、運営会社スタッフの温かいサービスと美味しい食事が好評だった。また世代を超えて同宿の同窓生と語り合う楽しい交流の場としても愛された。

しかし、10年後、社会経済状況が大きく変化、大型レジャー時代が来る。1993（平成5）年ごろから、利用者が減り赤字になった。ワカバ会の駐車場経営の利益をつぎ込んでも先が見



えず、山荘閉鎖が課題になった。ワカバ会理事会は理事と山荘利用経験者からなる山荘検討小委員会で会員の意見を広く集約、2003（平成15）年限りで一時閉鎖を決めた。

ところが、新任の三田高校長から、在校生に山荘でのクラスルーム合宿、部活動や受験勉強の合宿を経験させたい、一学級全員(40数人)が泊まれるように整備してほしいとの強い要望が出た。三田の進学率、知名度を上げるためだという。ワカバ会は母校への協力のため、これを容れ、2千万円掛けて、全館を大改装した。2005（平成17）年にリニューアルオープン、内装も設備もきれいになって現役高校生たちも涼しい軽井沢の合宿を楽しんだ。しかし3年後には校長が変わり、学校の方針も変わって山荘利用は縮小した。会員の利用も増えなかった。

ワカバ会理事会は、再度山荘の閉鎖を決定し、2010（平成22）年9月20日をもって軽井沢山荘は閉鎖された。山荘の土地建物は、翌年に1000万円で売却された。

高校同窓会によって45年間自主運営されたワカバ会軽井沢山荘のユニークな歴史である。



山荘経営の顛末

山口 謙一郎（8-1）理事 事業運営委員会委員長

1966（昭和41）年6月開業の「軽井沢山荘」は小規模（16名収容）ながらも夏季サロンとして主に第六高女卒業生の間で人気を博して来た。しかし三田高校卒業生の増加に伴い収容力増強の要望が高まり、1980（昭和55）年に新館建設が決定したため、宿泊事業者としての経験を活かし翌年から新館建設計画に参画した。以来設計者共々長野県との設計・建築の行政手続、土地管理会社の国土開発（株）との折衝、軽井沢町消防・警察・保健所への届出、運営委託業者選定、厨房機器・什器備品・寝具類の購入計画等の準備期間を経て1982（昭和57）年6月に完成し（22名収容）、翌月開業した。当初より1,000名以上（最盛期は1,600名）の利用が10年ほど続き、その間ゴルフ会、コーラス、バードウォッチングなどの催事も好評であった。また、運営委託した明食サービスの食事・サービス・衛生管理も多数の利用者から好評を得ていた。

しかし乍ら景気後退による外因のほか、第六高女卒業生の高齢化、週休二日制定着によるレジャーの多様化、マイカー利用以外での高額交通費（往復新幹線＋タクシー）等の要因が重なって利用者の漸減を来し、2002（平成14）年には500名を切るに至り、更に建物の老朽化が進行したため、翌年閉鎖した。三田高生の合宿のため再オープンしたが、学校の方針転換により、2010（平成22）年に閉鎖し、3年後に土地建物を売却した。

新館開業準備期以来29年間山荘経営に携わった責任者として、食中毒はもとより火災、盗難等の事故が閉館期（10月～6月）も含めて一度も無かった事は真に幸甚であった。



山荘の思い出

吉原 ひろみ (44-1)

社会人になった頃、父の実家が道路拡張のために取り壊され、私たち家族は夏の家族旅行の行き場を失っていた。家族揃って休めるのは、お盆の数日。東京の暑さに嫌気がさし、どこか涼しいところへ行きたいが、あてがない。そんな時に、ふと思い出したのが「ワカバ山荘」だった。

2食付きでこの値段なら、贅沢は言えまい。大きな期待はせず、おそろおそろ訪ねたワカバ山荘は、良い意味で期待を裏切ってくれた。

おしゃれな外観、そして天井の高い食堂。窓を開ければ、ひんやりとした風が木々の間を抜けて吹き込む。食事は、贅沢な食材はないものの、非常に手の込んだ料理で、いつも大満足だった。朝は、家族は和食、好き嫌いの多い私だけ洋食にしてもらえたのが嬉しかった。部屋は和室で、家族でごろごろするには最高の空間。クーラーなどなくても、窓を閉めてぐっすり眠れる幸せなさわかさは、何よりも贅沢に思えた。

ワカバ山荘がなくなって久しいが、今でも夏になると軽井沢を思い出す。残念ながら夏の最盛期は高級すぎるので、時期を外してホテルを取るのだが…たとえ紅葉が始まり、コートを現地調達するほど寒くても、私にとって、軽井沢旅行はずっと「夏休み」なのだ。



わかば第67号の表紙を飾った浅間山

楽しい企画行事

ワカバ会では長年、会員の親睦を図る事業の一環として、下記のような行事を続けてきた。今も多くの会員やその友人が、安心して参加し、年齢差を超えて和気あいあい、楽しんでいる。

小さな旅

日帰り古都鎌倉、横浜界限、湘南地域などを講師とともに歩き、見て、学んで、食べて、友人づくりを楽しむ。

第5回「湘南散歩」(最終回)湯河原 齋藤 節子 (7-3)

3月29日。窓外に燦めく春の海を見て湯河原に到着。参加者は20名です。講師は中村實先生。最初に訪れたのは、日本國激動の20世紀に大きな足跡を残された重光葵氏の記念館。帝大卒業後、外交官、外相、政治家として日中戦争、第二次世界大戦、終戦、日ソ交渉、国連加盟等、氏の果たされた重責がビデオ、写真等で紹介されています。昼食後は、昭和11年の日本近代史上、未曾有のクーデター未遂事件「二・二六事件」の東京以外の現場「光風荘」へ。地元の老舗旅館別館で静養中の牧野伸顕伯爵が襲われ、叛乱青年将校に放火されたが、伯爵は脱出に成功。犯人は後日、自決します。最後は福泉寺へ。肩から上だけの釈迦像(首大佛)は徳川光友公の奉納です。



最終回の「湘南散歩」は戦前・戦後の昭和への感慨と共に、そっと机に寄り添う重光氏の恩賜の義足が、深く心に残りました。

(2017年3月29日実施) わかば第82号より

室内ゲーム(健康麻雀)大会

25年続いている年1回の催し。ワカバ会独自の「吸わない、飲まない、賭けない」を掲げた頭脳のスポーツ大会。

第23回ワカバ会健康麻雀大会 柴崎 徹夫 (12-7)

60歳の定年を機に、家族に迷惑をかけた麻雀から手を洗った。5年前にA子サンから母親の介護で、月例会に出られないとSOS要請電話。試験のときに大変世話になった借りが有る。借りを返すか誓いを破るか思案の末に出かけた。

ワカバ会認定の「吸わない・飲まない・賭けない」の健康麻雀。その日のお相手は、第六高女の大先輩3名様。

ブランクと慣れないルール、女性とのお手合わせで予期せぬ大敗。現在は、ピンチヒッターからレギュラーに定着し、1カ月に1回のカミサン公認の麻雀を楽しんでいる。最近覚えたパソコンでの麻雀ゲームで勘を養い、チョンボーをしないよう白内障の手術をして大会に臨んだ。

大会ルールは月例会と計算方法が違っているので、メンバー三人の持ち点を計算に入れての作戦。運(つき)に頼らず作戦を立てた結果、優勝出来ました。



(2016年4月20日実施) わかば第80号より

親睦ゴルフ会

毎年1回、秋に開催され、35回を数えるゴルフコンペ。大先輩から新入会員まで和やかに集う同窓会コンペならではの催し。

初参加、ラッキーな初優勝! 平山 廣二 (23-6)

8月にサラリーマン生活を卒業し、初めてワカバ会Gコンペに参加しました。当日は30℃の暑さになったものの、まるで軽井沢でプレーしている様な爽やかな日でした。参加者は、第六高女時代の方から三田高32回生まで、男子10名女子4名のユニークなメンバーが集まりました。私は第1組でスタートし、豪快なショットを打つ三輪田会長と、86歳とは思えない的確なショットの高師先輩とご一緒させて戴き、和気藹々にて何とか93で回れました。昼食時は、最近の三田高の様子、戦時中の第六高女の話、懇親会では、三田高時代の話などで盛り上がり、改めて母校の歴史の深さを感じました。また同姓同名の平山孔嗣さんにもお会い出来、感激でした。成績発表になりまさかの優勝、新ペリア競技と同伴者の方々に助けられた様です。幹事の皆様、同伴戴きました両先輩、大変有難うございました。

(2016年10月20日実施) わかば第81号より



シャドーボックス講習会

紙で立体的な作品を作る。スヌーピーの図柄やクリスマスの室内飾りなどを仕上げた。

シャドーボックス講習会 田澤 恵子 (26-1)

ニューヨークの技法を使って、同じカードを何枚かカットして重ね、立体的な作品に仕上げるのがシャドーボックスです。

2004年2月にワカバ会企画行事として「第1回シャドーボックス講習会」が始まりました。遠く広島からの会員参加もあり、楽しく作品を仕上げたことを思い出します。専用のカードを1枚1枚丁寧にカットし、丸みをつけながら立体感を出していきます。カットしている時の皆さんの顔はどなたも真剣そのものでした。

専用のシリコンで高さを出しながら組み立てていく地道な作業を続けること2時間で完成です。出来上がった作品は額に入れ、完成した作品を前にした参加者の笑顔を忘れることが出来ません。以後2012年までの9年間、様々な作品を会員の皆様と一緒に作成し、完成した作品の数々はどれも大切な思い出となりました。「シャドーボックス講習会」は、現在企画行事としては開催しておりませんが、私自身は今でも師事し、また新たな作品に挑戦し続けております。

いつの日かまた会員の皆様と楽しい作品作りが出来れば幸甚に思います。



お祭りとのふれあい

日本各地の伝統的な祭りを、講師の解説付きで楽しむ。奈良西大寺方面に始まり年1回12回にわたって川越、諏訪などを巡っている。



コーラスの集い

軽井沢のわかば山荘を利用して、発声法を学び、コーラスを楽しむつどい。毎年夏の山荘コンサートが開かれた。山荘閉鎖後もミニコンサートを開催した。



蒲田切子制作体験講座

蒲田切子のガラス工芸の作業場に入り、職人さんの手助けで実際にグラインダーを使いガラスをカットし、マイグラスを制作した。



近年人気の講座

筑波宇宙センター見学会

宇宙航空研究開発機構にお勤めだった三輪田会長の提案で実現した日帰り見学会。日本の宇宙開発の中核・筑波宇宙センターの宇宙飛行士コースや展示館を見学する。家族参加を想定して夏休み、春休みに開催。

筑波宇宙センターを見学して 宮本 史子 (41-6)

バレー部の大先輩である三輪田会長にお会いしたいという一心で参加した今回のプログラムは、会長の人柄、仕事への熱意を感じることでできるものでした。

会長がスペースドームを案内してくれ、人工衛星、ロケット、宇宙ステーションなど開発してきた過程を教えて下さいました。そして、宇宙飛行士養成施設と「きぼう」の管制室を見学。最後は会長で推薦の筑波を満喫できる筑波ハム自然味工房

でのおいしいランチを頂き、日常の忙しさから解き放たれた1日となりました。参加者は、第六高女の大先輩や、退職をされ余暇を楽しんでいる先輩など、歴史を感じることができる方々ばかりで、あらためて三田高の伝統と人材の豊かさを実感できました。このような機会を与えて下さった事務局の方に感謝申し上げます。

(2017年7月28日実施) わかば第82号より



東京国立近代美術館工芸館 タッチ&トーク

工芸館のガイドスタッフによる工芸展覧会鑑賞プログラム。著名な作家の作品や資料に直接手を触れてその魅力を実感する。

「タッチ&トーク」で興奮! 中村 ふく子 (22-3)

陶磁器に興味があったので、近代美術館の“タッチ”に惹かれ、初めてワカバ会行事に参加しました。

工芸品は触れてこそ本来の在り様が感じられるもの。陶磁器、ガラス工芸等の重さ、肌ざわりを直に体験できて短い時間ながらも興奮しました。同時開催の「栗木達介陶芸展」にまで丁寧なガイドをして下さり、知的?好奇心満足のひとときでした。ラー・エ・ミクニのランチもおいしく(ワインがあったらもっと…)、楽しく先輩、後輩の輪に入れていただき感謝します。

本館の「藤田嗣治所蔵展」を食後の散策にする贅沢はなかなかあるものではありません。企画実行して下さい事務局の皆様、お礼申し上げます。

北の丸公園の色付いた木々の美しさと共に今年の思い出に残る日でした。

(2015年11月11日実施) わかば第79号より



東京ステーションホテル見学会

東京駅百周年から始まった見学会。国の重要文化財である駅舎内の東京ステーションホテルの機能的な施設を見学し、東京駅最上部の宿泊者専用ラウンジでランチを楽しむ。

観劇会 鑑賞会

歌舞伎観劇会「新春浅草歌舞伎」、「東京宝塚歌劇 花組公演」、「あらかわ創造舞台芸術祭」、オペラ鑑賞会「藤原歌劇団公演・ルチア」、オペラ鑑賞会「東京二期会オペラ・蝶々夫人」など。

2017年白珠祭出品作品より (敬称略)



多治見 操
(第615-1)



笹 のぶえ
校長先生



栗原 ふみ子
(高5-5)



小幡 則子
(高32-3)



小粥 和子
(高8-6)



目代 美知子
(高19-5)



香河 郁世
(高4-4)

同窓会ギャラリー展示

ワカバ会では、毎年秋に行われる三田高校の文化祭「白珠祭」の展示部門に2004(平成16)年から参加している。ワカバ会の展示室を設けて、会員から募集した自筆の絵画、書、自作の装飾品、ドレス、編み物、工芸品などを展示。当日この部屋を訪れた方々に、茶菓の接待をしている。

事業企画、思い出すまま

中村 左都子(7-2) 企画委員長



事業企画の思い出は、軽井沢にワカバ山荘が開荘した頃から始まります。それ以前は、学校行事で協賛して、大田区の農園での「いも掘り」、運動会での「メイポール」、第六高女卒のOG中心の「観劇会」などであったくらいと先輩から伺っておりました。その後は、「自然を楽しむ会」「小さな旅」「コーラスの会」「ヨガの会」「コンサート鑑賞」「山荘に一夜のゴルフ会」等でした。

現在の企画は、平均毎月1事業の割合で、変化に富んだ内容です。その内、長期連続の事業は、①34回を迎えた「親睦ゴルフ会」②24回の「健康麻雀大会」③14回の白珠祭参加「同窓会ギャラリー」④12回の「お祭りとのふれあい」 その他「タッチ&トーク」「東京国立近代美術館鑑賞」「湘南散歩」「筑波宇宙センター見学会」「JR東京駅と東京ステーションホテル見学昼食会」「音楽鑑賞会・観劇会」等々。こういった企画は、ワカバ会理事と企画委員会の皆さん、そして事務局の皆さんの協力による成果です。毎年5月発行の春号会報と一緒に申込書をお届けし、その場で申込み可能な形式にしました。

今後も、マンネリにならず、バラエティに富んだ企画にしていきたいと思っています。内容は、その時代、時代にマッチしたものを提案し続けて参ります。企画にあたっての苦労話はありませんが、多くの会員に喜んで頂ければ関係者一同満足です。「広がれ ワカバの輪」を願いながら、ペンを置きます。

お宝のスタインウェイピアノ



第六高女・三田高校のきずな健在

今は三田高校の音楽講堂の片隅にひっそりと置かれた、年代物のピアノ。90年に及ぶ第六高女・三田高校の歴史の流れを静かに見つめてきた、ドイツ・スタインウェイ社製のフル・コンサート・グランドピアノだ。第六の初代校長丸山丈作先生の教育方針に賛同した父兄の寄付により購入された当

時は、日本に数台しか輸入されていない最高級のピアノだった。

昭和30年代までの同窓生は、授業科目ごとに教室を移動するたびに、旧校舎の講堂の舞台の上に鎮座したピアノを見かけた。数学の高城重躬先生(故人)が、連日放課後に長時間弾いておられて、その豊かな音色に惹かれた生徒も多かった。

修理しながら大事に使われてきたお宝ピアノも、時がたち、部品の経年劣化や、学園紛争の嵐が吹き荒れたところに、壇上から突き落とされて破損した影響などから、使用不能になっていた。

2005(平成17)年東京都の財産調査で、価値が再認識されて、修理費240万円のうち100万円の補助金が付いた。残りをPTAと同窓会に援助してほしいとの校長からの要請があり、ワカバ会理事会は関心ある会員に一口2千円の寄付を求めて不足分はワカバ会が負担、修理費70万円を学校に寄付した。

大修理は困難を極めたそうだが、専門家の手により、見事に再生した。ワカバ会はこれを記念して、2007(平成19)年1月31日母校音楽講堂でニューイヤーズコンサートを開いた。桐生郁子理事以下、同窓生のプロ4人の素晴らしいピアノ演奏や独唱に、二百人を超す会員が参集して聞き惚れた。その後も三田高校PTA主催のコンサートが定期的に行われるなど、よみがえったピアノは、大事に次世代に受け継がれていく。



スタインウェイあれこれ

桐生 郁子（4-1）元理事

まるで、我々の入学を待っていたかの様に名器にふさわしく尊厳ある4階の講堂に置かれていました。スタインウェイがあるのならと着任された数学の高城先生は、放課後毎日の様に、4階でそのピアノを弾いていらっしました。その先生のソロで、ピアノ協奏曲の音楽会も開かれました。校舎建て替えもあって、ピアノは1階に降ろされてしまいました。改修しなくてはならなくなり、多くの卒業生のお力で改修され、その記念の音楽会は私達卒業生数名で行われました。たった1度でしたが、その後、後援会の方々の手で音楽会は毎年行われております。どんな名器であっても、しっかりとした管理を怠っていると、宝の持ちぐされになりかねません。ところで、私の宝物というならば、お金でも、ダイヤモンドでもありません。重要な精神力を培う事の出来た母校と同じくそこで学んだ多くの友人達です。



ほこりに思える我が母校、第六高等女学校三田高校での6年間を振り返って見る事に致します。欲しがりません勝つまでは！で過ごした小学6年生の夏休みに、終戦を知らされ、やっとの思いで疎開先の栃木県より戻ってきた東京はB29のおそろしさはなくなっていました。我が家は焼失しており、さて進路として校舎が戦火に遭っていない第六高等女学校を選び、運よく入学する事が出来ました。そこは私にとって楽園でした。何故って、自由に本物を得られる様な環境があったからでした。数え上げると切りがありませんが、まずは4階の講堂で、まるで礼拝堂でもあるかの様に立派なたたずまいで、身も心も引き締まる思いのする聖地でした。そこで第六高等女学校校歌を教えていただいたり、式典や演劇、プロのオーケストラの方々と音楽会など行われていました。私は放課後、殆ど下校ベルの鳴る迄、校内で充実した時を過ごしておりました。三田高校となり、私は経済的理由により、大学進学は不可能と思い、出来るだけ多くの科目を選択し、音楽では理論と実技で、声楽家の先生よりシューマンの詩人の恋全16曲をドイツ語で歌える様授業は進められて行き、そこで第2外国語としてドイツ語を学び始めました。英語も充実しており、卒業後海外に出て役立ちました。

音楽の準備室では、鈴木先生が指揮の勉強の為、名だたる指揮者の演奏するシンフォニーのレコードを聴いていらしたので、度々足を運び沢山シンフォニーを聴かせていただきました。そこで私達も演奏したくなり、困難を何とか越えるべく時間をかけて準備をし、とうとう卒業の年の1月、日比谷公会堂で昼夜2回の演奏会を実現させる事が出来たのでした。忘れもしません、ベートウヴェンの第九交響曲でした。そこで強く感じた事は、為せば成る何事も！と言う精神力を得た事でした。

それ以来、その精神力で社会へと歩み始め、次から次へと願望が手に入り、声楽家として長い年月、演奏活動が続けられております。これからも本物を追求しつつ歩を進めて参りたいと思っております。



多摩川河畔にある貴重な財産

あの農園は今、駐車場からトランクルームに



サツマイモや葉物野菜を栽培してきた。

1957(昭和32)年には、農園寮の老朽化や、生徒会の要望もあり、農園(農業実習)は終了した。しかし、ワカバ会は農園寮を改築して地域で要望があった保育園を開設した。ワカバ保育園は独立採算で経営され、零歳児保育をいち早く手掛けるなど大きな成果を挙げた。1977(昭和52)年には、保育園の経営を大田区に移管、土地の一部と建物を区に売却。残りの土地で28台収容の駐車場を経営し、安定した収益を得て、ワカバ会行事や軽井沢山荘の運営を支えてきた。2017(平成29)年7月末で駐車場を閉鎖し、現在は土地をトランクルーム用に一括賃貸している。

この農園の土地は、初代校長丸山丈作先生が、生徒の体を鍛え、健康増進にと多摩川河川敷の内務省の土地6千坪を東京府から無料賃借したことに始まる。河川敷には建物が作れないため、丸山先生は、ご自身の還暦祝いに同窓生や父兄から寄せられた祝い金で、土手外側に隣接する鵜の木の民有地460坪を購入し、農園寮舎140坪を建設してワカバ会に寄贈して下さった。ワカバ会はこれを基本財産の一部として、1936(昭和11)年10月に東京府から社団法人の認可を受けた。戦中戦後の食糧難時代には農園での知識と実習は家庭でも大いに役立ったといわれ、まさに丸山先生の見識の明だった。

戦後、男女共学になってからも続いた農園実習は、クラスごとに週1回授業を休んで農園に通っていたため、大学受験を目指す生徒には評判が悪くなり、前述のとおり1957(昭和32)年に中止された。農園寮が保育園になった後、河川敷は校庭の狭い三田高校の男子の運動場として、ラグビーや野球等のクラブ活動に使用されてきたが、平成になってから東京都に返還された。





オリジナルグッズ大集合



ワカバ会では会員間の交流を更に深めるための一助となればと、三田高校の校章を入れて、2003(平成15)年よりオリジナルグッズの作成・販売を始めた。

まず最初に、「ミニタオルハンカチ」「クリアファイル」「ストラップ」の3種類を作成。大変好評だったため「一筆箋」「レターセット」「タオルマフラー」「バンダナ」等、次々新しいグッズを作成。現在では「三田高校制服版キティの根付」をはじめさまざまなオリジナルグッズを販売しており、会報「わかば」に毎号掲載している。

ワカバ会オリジナルグッズ

お申し込みは、電話・FAX・E-mail にて、事務局まで



折りたたみトートバッグ
全5色 各700円
31×37×9cm
(広げるとA4サイズ
も入ります)



たたむと
こんなに
小さくなります



バンダナ 各500円



ワイン ピンク からし色 薄緑
薄紫 青紫 紫 桃色 オレンジ ミントグリーン
タオルマフラー 各800円



タオルポーチ 各500円



ハローキティ根付
650円
(寄付込1,000円)



携帯ストラップ
300円



ミニタオルハンカチ
各350円



クリアファイル
各50円



レターセット、
一筆箋
各100円



折りたたみ傘
各700円



3色4芯
ボールペン
150円



ボールペン
150円

年表

年月日	学校・社会	ワカバ会
1923 大正 12・ 1・15	東京府立第六高等女学校設置許可	
1・23	初代校長に丸山丈作就任	
4・8	第1回入学式挙行（240名）	
9・1	関東大震災	
1924 13・ 4・3	校服制定、夏冬共通、他校に先駆け全員洋服に 下級生から毎年修学旅行、富士登山、適応遠足など、斬 新な教育実施	
9・28	現在地に新築校舎落成、府立第三高女の仮校舎から移転	
1925 14・ 3	普通選挙法、治安維持法制定	
1926 15・ 4・4	第六高女校歌制定（土岐善麿作詞 島崎赤太郎作曲）	
12・25	大正天皇逝去、昭和天皇即位、昭和元年に	
1927 昭和 2・ 3・14	金融恐慌始まる	
1928 3・ 3・24	第一回卒業式挙行	
5・13		第六高等女学校同窓会結成、初代会長に丸山校長就任
1929 4・ 3		会報「若葉」創刊号発行
1931 6・ 3・30		同窓会館落成
5		同窓会を「若葉会」と改称
9・18	満州事変	
1932 7・ 3・1	満州国建国	
5・15	五・一五事件	
8・15	温水プール完成	
1933 8・ 9・28	第六高女創立10周年記念式典挙行、スタインウェイピアノを保護者の寄付で購入	
1934 9・ 5・27		同窓会名を「ワカバ会」と改称
1935 10・ 4・1	多摩川河川敷を借用し農園開設、農業実習開始	
1936 11・10・19		ワカバ会に社団法人認可
1937 12・ 5・9		社団法人ワカバ会第1回総会
7・7	日中戦争始まる	
1938 13・ 4・1	国家総動員法公布、6勤労動員始まる	
1939 14・ 7・8	国民徴用令公布	
1940 15・11・10	紀元二千六百年祝賀行事	
1941 16・ 1・31	丸山校長退職、第2代校長に伊井松蔵就任	
3		戦争の為、会報廃刊
3・1	国民学校令公布	
3・16		母校歴代校長をワカバ会会長とする
4	この年度より修学旅行中止	
12・8	太平洋戦争始まる	
1943 18・ 7・1	東京都制施行、東京都立第六高等女学校と改称	
9・28	創立20周年記念式典挙行	
10・18	第3代校長に常田宗七就任	
1944 19	軍需工場への動員、空襲、疎開で授業できず	
1945 20・ 3・10	東京大空襲	
	8・6広島、8・9長崎に米国軍が原子爆弾投下	
8・15	太平洋戦争終結 終戦の詔書 天皇ラジオ放送	
9・1	第六高女授業再開	
9・20	戦時教材の黒塗り通達	

年月日	学校・社会	ワカバ会
1945 昭和 20・ 11・3 11・10	日本国憲法公布	戦後初の総会開催、入会金を100円にする
1947 22・ 3・31 4・1 8・2	教育基本法、学校教育法公布 六・三制教育始まる 文部省（新しい憲法のはなし）刊行	
1948 23・ 4・1 7・15	東京都立第六女子新制高等学校と改称 教育委員会法公布	
1949 24・ 2 6・17	第5代校長に百田治朗就任	母校25周年に石井柏亭の絵画を贈呈
1949 24・ 10 11・26		戦後初の会報発行 バザー開催
1950 25・ 1・28 4・8 5 6 11	東京都立三田高等学校と改称 男女共学実施（男子84名、女子241名入学） 男子制服制定 三田高校校歌制定（大木惇夫作詞、乗松昭博作曲） 朝鮮戦争	水泳講習会始まる 音楽会開催
1951 26・ 2 9・4 9・8	サンフランシスコ条約調印 日米安全保障条約調印	催し物企画の母体となる六日会始まる（28年まで）
1952 27・ 1・19	三田高校生が日比谷公会堂で第9交響曲を演奏	
1953 28・ 3・15 10・29 11・28	男女共学初の卒業式 文化祭開催 創立30周年記念式典挙行 校舎南棟屋上に記念図書館落成	ワカバ会館に宿泊施設 母校創立30周年記念図書館建設費50万円贈呈
1955 30・ 10・1 12・18	第6代校長に今野善胤就任 日本、国際連合に加盟	
1956 31・ 9・14		ワカバ会館を東京都の要請で無償寄付（49年までは従来通り使用）
1957 32 6・1	生徒会の要望を入れ、男子制服を更新 ユネスコ共同学校に指定され、ユネスコスクールに加盟	農園寮を改築し、わかば保育園設立 11月東京都公認に
1958 33・ 12・23	東京タワー完成	
1959 34	指導要領改訂、進学指導に文系、理系を明確に AFS留学生試験に参加（以後毎年留学生を出す）	
1960 35	60年安保闘争激化	
1962 37・ 4・1 4	第7代校長に西村三郎就任 生徒数増加で1学年8学級	母校創立40周年記念事業にプールのロッカー・更衣室整備費52万円贈呈
1963 38・ 10・28 11・10 11・25	創立40周年記念式典挙行	ワカバ会創立35周年記念総会 終身会費3600円徴収を可決 南軽井沢に会員の福利厚生用に土地千坪購入
1964 39・ 4・29		西村会長（校長）の助言で組織改革、会長は会員より選出し、校長は名誉会長に

年月日	学校・社会	ワカバ会
1964 昭和 39・ 6・13	三田高校文化祭の名称を白珠祭とする	第8代会長に、同窓生初の篠塚光（23年から副会長）を選出
10・1	東海道新幹線開通	
10・10	東京オリンピック開催	
1965 40	ベトナム戦争始まる(73年終結)	
4・29		軽井沢にワカバ会山荘オープン 建設費680万円は会員の募金と事業収益で
1966 41・ 1	中国文化大革命	
5		
1967 42・ 2・23	学校群制度入試始まる 入試は国英数3科目	
4・1	三田・日比谷・九段高校が第11群に 第8代校長に実方亀寿就任	丸山先生寄贈の65万円を基金に「丸山記念奨学金」制度 初代会長丸山丈作先生逝去
1968 43	水俣病、イタイイタイ病を公害病と認定	
1969 44・ 1	東大安田講堂事件	
6	ピロティ式体育館落成	
1970 45・ 3・14	日本万国博覧会開催	創立45周年記念総会（ホテルニューオータニ、801名参加） 記念音楽会開催(虎ノ門ホール) 定款変更 理事に議決権、評議員会は審議機関に
11		
1971 46・ 4・1	第9代校長に吉田元定就任	
5・6		
1972 47・ 5・15	沖縄返還	保育園閉園 大田区に土地建物を売却 園児、職員を移管 校舎全面改築のため、ワカバ会館取り壊し（43年間のシンボル消える）各種講習会も終了 新校舎6階会議室にワカバ会事務所を確保
6・4		
9・12		
1973 48・ 3	校舎全面改修計画案作成	
4	新入生から男女各160名の同数に	会員名簿作成
9・27	創立50周年記念式典挙行	
10	石油ショック	
1974 49・ 3・27		
4	制服を廃止し校服を制定	校舎落成祝いに金50万円と記念樹、校舎表壁に大時計を贈呈 大田区鶉の木の保育園跡地に駐車場経営開始
9	三田高校校舎全面改築工事始まる	
1975 50・ 4・1	第10代校長に長谷部正治就任	
1976 51・ 2・5	ロッキード事件発覚	
4・1		第9代ワカバ会会長に若菜允子（高5）就任 軽井沢山荘増改築の為山荘建設実行委員会発足 募金を決定
1977 52・ 4・1	都立初の海外帰国生学級設置	
6・4	校舎改築落成記念式典挙行	
1979 54・ 1・13	第1回国立大学共通一次試験実施	
4・1	第11代校長に杉村親一就任	第9代ワカバ会会長に若菜允子（高5）就任 軽井沢山荘増改築の為山荘建設実行委員会発足 募金を決定
4・29		
1981 56・ 4・29		
1982 57・ 2・25	グループ合同選抜制による入試開始 試験は5教科	
4・1	第12代校長に古松彰就任	

年月日		学校・社会	ワカバ会
1982	昭和 57・ 6・15		軽井沢山荘新館完成（基本財産6000万円と会員の募金1450万円で） 理事会に委員会制度導入 活動強化目指す
	10		
1983	58	国際教育部発足、全校あげて国際理解教育を推進	
	4・29		新入会員から入会金5000円徴収に変更
	9・16		母校60周年記念事業分担金35万円拠出
	10・8	創立60周年記念式典挙行	
1984	59	外国人講師による第1回国際シンポジウム開催	
1985	60・ 4・1	第13代校長に藤川侃二就任	会員名簿発行
	4・29		毎年一口2000円の維持会費制度導入決定
1987	62		会報「わかば」29号より B 5 版に変更
1988	63・ 5・1		創立60周年記念総会 記念誌「私たちの昭和史」発行
1989	64・ 1・7	昭和天皇逝去、今上天皇即位 元号は平成に	
	平成 1・ 2	文部省、指導要領で日の丸君が代が義務付け	
	4・1	第14代校長に依田好雄就任	
1990	2・ 1	第1回大学入試センター試験実施	
	4		会員名簿作成
1992	4・ 4	L L 教室コンピューター室設置	
1993	5・ 4・1	第15代校長に森山晴美就任	
	10・2	創立70周年記念式典挙行	
		欧州連合条約発効 EU12か国発足	ワカバ会業務にコンピューター導入
1994	6	教育課程改正で社会科に地理・歴史科、公民科新設、家庭科が男女共修に	
		入試単独選抜になる	第10代会長に小野紘一(高8)就任
1995	7・ 1・17	阪神・淡路大震災発生	
	4・1	第16代校長に岡本裕之就任	
			会報わかば年2回発行へ 阪神・淡路大震災に10万円寄付
1996		都立入試に推薦選抜制度開始	関西支部大震災体験文集作成
1998	10・ 6・7		創立70周年記念総会（有明ビッグサイト） 石井好子氏講演、464名が参加
1999	11	情報公開法制定	
2000	12・ 4・1	第17代校長に米田敏男就任	
2001	13・ 9・11	米国で同時多発テロ	
2002	14・ 4・6	学校週5日制度開始	
			総会にホームカミングデー実施 ワカバ会電子メール開設 軽井沢山荘の利用者減少、経営難に
2003	15	学区制撤廃後初の新入生、通学地域全都内に拡大	
	3	イラク戦争	
	4・1	第18代校長に揚村洋一郎就任	
	11・22	創立80周年記念式典挙行	校旗（33万円相当）と寄付金50万円贈呈 ワカバ会ホームページ開設 山荘閉鎖決定 オリジナルグッズ作成販売開始 第11代会長に笠原俊也(高15)就任

年月日	学校・社会	ワカバ会
2004 平成 16	重点支援校に指定	閉鎖を決めた軽井沢山荘を学校長の要請で、2千万円かけて改築し、経営続行決める
9		白珠祭に同窓会ギャラリー開設
2005 17		軽井沢山荘リニューアルオープン、三田高校生合宿、勉強会などに利用
2006 18・4・1	第19代校長に須藤勝就任	スライムウェイピアノ修理の為、募金を募り70万円を寄贈
2007 19・1・21		スライムウェイ新年演奏会開催
4・1	校服変更	
2008 20	三田高校定時制閉校、5千人超す生徒が学んだ校門に記念プレート設置	
6・8		80周年記念総会（品川プリンスホテル 在校生の合唱、同窓生柳家小春治氏口演 447名参加）
6・16		在校生にキャリアガイダンス開始
10・30		創立80周年記念演奏会（紀尾井ホール 15名の同窓生プロが演奏 聴衆630人）
2009 21・4・1	第20代校長に及川良一就任 総選挙で自民大敗、日本初の政権交代	
2010 22	進学指導推進校に指定される	新公益法人制度移行委員会設置
3	高校授業料無償化法	奨学金制度改革（年額一人6万円の給付制に）
10		軽井沢山荘閉荘
2011 23・3・11	東日本大震災発生 東京電力福島第1原子力発電所の原子炉事故で広範な放射能汚染発生	
5・1		東日本大震災被災者に救援募金50万5千円集まる、会員39名に見舞金、避難の転校生に奨学金贈呈
2012 24・3・22		第12代会長に三輪田真（高22）就任
10・1	海外修学旅行開始（韓国）	
12・2		臨時総会開催 定款改定、一般社団法人への移行を承認
2013 25・4・1		一般社団法人ワカバ会を東京都が認可、登記手続き完了
5・10	三田高校創立90周年記念式典挙行	
5・19		総会で会長に三輪田真、理事16人による新体制を承認 評議員制度廃止
6		山荘売却完了
9		一般社団法人移行記念ハローキティ根付制作販売開始
2014 26・4・1	第21代校長に笹のぶえ就任	
2015 27	言語能力向上拠点校、オリンピック・パラリンピック教育推進校に指定される	奨学金制度を改革（年額一人12万円給付に）
6	公職選挙法改正、選挙権年齢18歳以上に引き下げ	
2016 28	英語教育推進校に指定される	
7・20	三田高等学校管弦楽団がニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルと共演（サントリーホール）	
2017 29	知的探究イノベータ推進校に指定される	
2018 30・5・1		会報「わかば」83号よりA4版に変更
6・3		創立90周年記念式典（予定）

編集後記

60周年の素晴らしい、重みのある記念誌“わたしたちの昭和史”から、2018年度ワカバ会創設90周年へ、今までの足跡・歴史を振り返りつつ、新たな一步を踏み出す機会とすることを、2017年4月理事一同で一致し、90周年記念誌を発行することを決定した。60周年誌という思いがしっかり詰まった記念誌をということまでは出来ないが、30年間ほどの様子を中心にし、若い世代に関心を持ってもらうような冊子にしたいと思った。編集委員会では次の3つの方針を掲げた。若い期の世代には「昔はそうだったんだ。知らなかった。」、期の古い世代には「最近はどうなの?」というような振り返りができるような冊子にすること、学校での取り組みの連携を加味しつつ、幅広く見てもらえるような冊子にすること、そして最後にワカバ会の礎がわかる冊子にすること、である。しかし、肖像権の問題から写真の掲載が難しいのが現実だったが、校長先生をはじめ先生方、多くの会員やワカバ会事務局のご協力により、完成に至った。原稿依頼に快く引き受けていただいた方々に感謝する。

同窓会は今になってみると、私にとっては原点。悩み多き高校生活を支えてくれた先生方や友人に感謝しつつ、前向きな領域を人生に与えてくれている。

この記念誌を通して記録を積み重ね、100周年につながるものになれば幸いである。

編集委員長 西上原 節子 (24-5)

90周年誌編集委員会

鈴木 美智子 (9-3) 田 村 和 子 (10-5)
西上原 節子 (24-5) 田 中 浩 (32-5)
小 針 淳 (40-3)

表紙デザイン 小 針 淳 (40-3)
紙 面 構 成 一 色 秀 司 (35-3)

〔出 典〕

ワカバ会創立60周年記念誌「わたしたちの昭和史」
日本史年表、地図(吉川弘文館)
東京都立三田高等学校 創立90周年記念誌

